

---

# 道徳教育

---

## 1 研究テーマ

### (1) 研究テーマ

自己理解、他者理解を深めるための学年単位での取組の調査と指針の作成

### (2) 研究のねらい

学年集団の運営として、意識的に生徒の心理的安全性を高めるかかわりを行うことで、生徒集団における自己肯定感の高まりや他者理解の意識向上に影響を与えることができるのではないかと考えた。本研究では、「学年集団と道徳意識の関連性を明らかにする」という目的のもと、複数の学校の教員へアンケートとインタビュー調査を実施して、学年集団と道徳意識の関連性を分析した。

### (3) 背景

昨年度の研究では、心理的安全性を確保した授業を通して生徒の自己肯定感が高まるということが明らかになった。しかし、個々の自己肯定感が高まったことは確認できたが、以下のような課題も見いだされた。

- ① 自己肯定感が、「他者意識」や「道徳意識」と十分結びついていない。
- ② 学校や学年、学級への「良い意味での帰属意識」が低い。(①の課題に影響を与えている。)
- ③ 学年に注目すると、手探り状態で前年踏襲型の運営が行われており、学年単位での教育活動が形骸化している。(②の課題に影響を与えている。)

『生徒指導提要(改訂版)』には、「全校又は学年の児童・生徒で協力し、よりよい学校生活を築くための体験的な活動(高等学校は、全校若しくは学年又はそれらに準ずる集団で協力し、よりよい学校生活を築くための体験的な活動)を通して、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養いながら資質・能力を育成する。」(文部科学省 2022 p60)と示されている。また、「この目標の下に、全校又は学年などを単位として、学校生活に秩序と変化を与え、学校生活の充実と発展に資する体験的な活動を行うことを内容とする教育活動が、学校行事に他なりません。学校行事の内容は、学習指導要領では小・中・高等学校とも基本的には同様となっており、小学校における集団活動や体験活動の豊かな実践が中学校・高等学校における学校行事の充実につながります。学校行事の特質は、多くの点で生徒指導の実践上の視点を生かすことのできる教育活動であると言えます。(中略)このような、学級・ホームルームの場を超えた大きな集団の規模で行われる集団活動である学校行事では、他の学級・ホームルームや、異なる学年の児童生徒との交流、体験的な活動など、普段の学級・ホームルームでの生活や教科等の学習では経験する機会が少ない活動が行われることとなります。そのことが、よりよい人間関係の構築や豊かで充実した学校生活づくりにつながります。特に、文化的行事や体育的行事、遠足(中学・高等学校では旅行)・集団宿泊的行事では、全校縦割りの活動で協力し、励まし合ったり、集団宿泊活動及び自然体験学習などで寝食を共にしたりすることで、協力し合い、支え合うなどの直接体験を通して、自他のよさに気付いたり、人間関係を深めたり、命の大切さを学んだりすることが可能となります。」(文部科学省 2022 p66)と示されており、「学校行事は次の5つの内容、(1)儀式的行事、(2)文化的行事、(3)健康安全・体育的行事、(4)遠足(中学校・高等学校は、旅行)・集団宿泊的行事、(5)勤労生産・奉仕的行事、から構成される。」(文部科学省 2022 p66)とも示されている。

研究推進委員会では、これらの目標達成の方策の一つとして、「学年運営の参考書」のような学年運営のベースとなる指針を作成することを決めた。2025年に神奈川県教育委員会が発出している『令和7年度 学校運営の重点課題【高等学校版】』には、学校運営に関わる課題や指針が示されているが、学年集団の運営に特化した指針となるものがないのが現状である。

以上のことから、本研究では、昨年度の「授業内での心理的安全性」に注目した研究から、対象範囲を「学年」という単位に拡張することにした。県内の高等学校6校を対象にアンケート及びインタビュー調査を実施し、「学年集団のあり方と生徒の道徳意識の関係を明らかにしていくことを通して、これから求められる道徳教育における学年集団の在り方を見出し、「学年運営の指針」を作成していく。

## 2 アンケート及びインタビュー調査

「学年運営の指針」を作成するにあたり、アンケート及びインタビュー調査を行った。

### (1) アンケート調査

アンケートのねらいは、「学年集団と道徳意識の関連性」について教員がどのように意識しているかを明らかにすることである。具体的には次のとおりである。

○学年という集団における居心地の良さに教員がどれくらい寄与できると考えているか。「生徒にとって」と「教員にとって」の意識を比較することで、教員の関わり的重要性をどのように受け止めているのかを明らかにする。

○学年行事に対して、心理的安全性や良い意味での帰属意識について意識しながら関わっているか。また、期待感がどの程度あるのか。

○学年集団と道徳教育について教員がどの程度意識して教育活動を行っているか。

研究推進委員の所属校(6校)の教員を対象にアンケートを実施し(表1)、168名から回答を得た。

この研究における「学年集団〈生徒〉のまとまり」と「学年集団〈教員〉のまとまり」の定義は次のとおりである。

○この研究において、学年集団〈生徒〉のまとまりとは次の2点である。

- ・学年の生徒集団に対して、それぞれが一定程度の心理的安全性が保たれている状態。
- ・学年の生徒集団が、良質な(適度な)帰属意識を感じている状態。

○この研究において、学年集団〈教員〉のまとまりとは次のとおりである。

- ・学年に対して、方向性の共通認識がある状態。

表1 学年集団と道徳意識の関連性についてのアンケート項目

質問①	所属校を選択してください。 □ A校 □ B校 □ C校 □ D校 □ E校 □ F校 ※研究推進員の所属校(6校)
質問②	現在の学年での役職を選択してください。 □ 担任 □ 副担任 □ その他
学年集団(生徒)のまとまりについてお聞きします。【全6問】 ※本アンケートにおける「学年集団〈生徒〉のまとまり」とは以下の状態を指します。 学年集団〈生徒〉のまとまり ・学年の生徒集団に対して、それぞれが一定程度の心理的安全性が保たれている状態。 ・学年の生徒集団が、良質な(適度な)帰属意識を感じている状態。	
質問③	学年集団(生徒)のまとまりは、生徒の成長にとって、特に重要な要素だと思いますか。 □ そう思う □ ややそう思う □ あまりそう思わない □ そう思わない ※質問④～⑯も同様(4件法)
質問④	学年集団(生徒)のまとまりは、生徒の育成にとって、特に重要な要素だと思いますか。
質問⑤	学年集団(生徒)のまとまりは、生徒が安心して学校生活を送るために、特に重要な要素だと思いますか。
質問⑥	学年集団(生徒)のまとまりに対して、学年単位の行事【修学旅行】は、プラスの影響(効果)があると思いますか。
質問⑦	学年集団(生徒)のまとまりに対して、学年単位の行事【校外学習・遠足等】はプラスの影響(効果)があると思いますか。
質問⑧	学年集団(生徒)のまとまりに対して、学年単位の行事【学年集会・LHR等】はプラスの影響(効果)があると思いますか。
学年集団(教員)のまとまりについてお聞きします。【全8問】 ※本アンケートにおける「学年集団〈教員〉のまとまり」とは以下の状態を指します。 学年集団〈教員〉のまとまり ・学年に対して、方向性の共通認識がある状態。	
質問⑨	学年集団(教員)のまとまりは、生徒の成長にとって、特に重要な要素だと思いますか。
質問⑩	学年集団(教員)のまとまりは、生徒の育成にとって、特に重要な要素だと思いますか。
質問⑪	学年集団(教員)のまとまりは、生徒が安心して学校生活を送るために、特に重要な要素だと思いますか。
質問⑫	学年集団(教員)のまとまりは、学年単位の行事【修学旅行】にはプラスの影響(効果)があると思いますか。
質問⑬	学年集団(教員)のまとまりは、学年単位の行事【校外学習・遠足等】にはプラスの影響(効果)があると思いますか。
質問⑭	学年集団(教員)のまとまりは、学年単位の行事【学年集会・LHR等】にはプラスの影響(効果)があると思いますか。
質問⑮	学年集団(教員)のまとまりは、「生徒指導・教育相談」への効果的な取組のために、特に重要な要素だと思いますか。
質問⑯	学年集団(教員)のまとまりは、「キャリア教育(探究・進路等)」への効果的な取組のために、特に重要な要素だと思いますか。
道徳教育の視点についてお聞きします。【全1問】	
質問⑰	学年に関わる行事運営の中で、道徳教育の視点を意識していますか。

表2 アンケート結果

回答期間	令和7(2025)年10月20日～31日				
対象	研究推進委員所属校(6校)職員				
回答数	168				
学年集団(生徒)のまとまりについての質問		そう思う	やや そう思う	あまり そう思わない	そう 思わない
質問③	学年集団(生徒)のまとまりは、 <u>生徒の成長</u> によって、特に重要な要素だと思いますか。	69.6%	27.4%	3.0%	0.0%
質問④	学年集団(生徒)のまとまりは、 <u>生徒の育成</u> によって、特に重要な要素だと思いますか。	63.1%	33.9%	3.0%	0.0%
質問⑤	学年集団(生徒)のまとまりは、 <u>生徒が安心して学校生活を送るために</u> 、特に重要な要素だと思いますか。	66.7%	26.8%	6.0%	0.6%
質問⑥	学年集団(生徒)のまとまりに対して、 <u>学年単位の行事【修学旅行】</u> は、プラスの影響(効果)があると思いますか。	49.4%	41.1%	7.1%	2.4%
質問⑦	学年集団(生徒)のまとまりに対して、 <u>学年単位の行事【校外学習・遠足等】</u> はプラスの影響(効果)があると思いますか。	53.6%	38.1%	6.0%	2.4%
質問⑧	学年集団(生徒)のまとまりに対して、 <u>学年単位の行事【学年集会・LHR等】</u> はプラスの影響(効果)があると思いますか。	51.2%	40.5%	7.1%	1.2%
学年集団(教員)のまとまりについての質問		そう思う	やや そう思う	あまり そう思わない	そう 思わない
質問⑨	学年集団(教員)のまとまりは、 <u>生徒の成長</u> によって、特に重要な要素だと思いますか。	70.2%	21.4%	7.1%	1.2%
質問⑩	学年集団(教員)のまとまりは、 <u>生徒の育成</u> によって、特に重要な要素だと思いますか。	77.4%	17.3%	4.8%	0.6%
質問⑪	学年集団(教員)のまとまりは、 <u>生徒が安心して学校生活を送るために</u> 、特に重要な要素だと思いますか。	76.2%	20.2%	3.0%	0.6%
質問⑫	学年集団(教員)のまとまりは、 <u>学年単位の行事【修学旅行】</u> にプラスの影響(効果)があると思いますか。	73.2%	20.8%	4.8%	1.2%
質問⑬	学年集団(教員)のまとまりは、 <u>学年単位の行事【校外学習・遠足等】</u> にプラスの影響(効果)があると思いますか。	71.4%	23.2%	4.2%	1.2%
質問⑭	学年集団(教員)のまとまりは、 <u>学年単位の行事【学年集会・LHR等】</u> にプラスの影響(効果)があると思いますか。	72.0%	22.0%	4.8%	1.2%
質問⑮	学年集団(教員)のまとまりは、「 <u>生徒指導・教育相談</u> 」への効果的な取組のために、特に重要な要素だと思いますか。	80.4%	17.9%	1.8%	0.0%
質問⑯	学年集団(教員)のまとまりは、「 <u>キャリア教育(探究・進路等)</u> 」への効果的な取組のために、特に重要な要素だと思いますか。	72.0%	21.4%	6.5%	0.0%
道徳教育の視点についての質問		そう思う	やや そう思う	あまり そう思わない	そう 思わない
質問⑰	学年に関わる行事運営の中で、 <u>道徳教育の視点</u> を意識していますか。	25.0%	47.6%	19.0%	8.3%

アンケート結果(図1～3)より、学年集団〈生徒〉のまとまりについての質問項目⑥⑦⑧の回答における「そう思う」の割合が、学年集団〈教員〉のまとまりについての項目⑫⑬⑭の「そう思う」に比べて低いことが分かる。このことから、教員にとって、行事が生徒のまとまりにプラスの影響を与える期待値は低いのではないかと推察する。これは学校行事、学年行事が前年踏襲や形骸化しており、教員自身が明確なねらいや目標を設定しないまま行事が行われているという現状が要因の一つになっていると考えられる。

また、⑰の項目では「そう思わない」「あまりそう思わない」が合わせて約27%を占めており、先生方の学年行事運営に対する道徳的な要素の意識は低いことが示唆された。

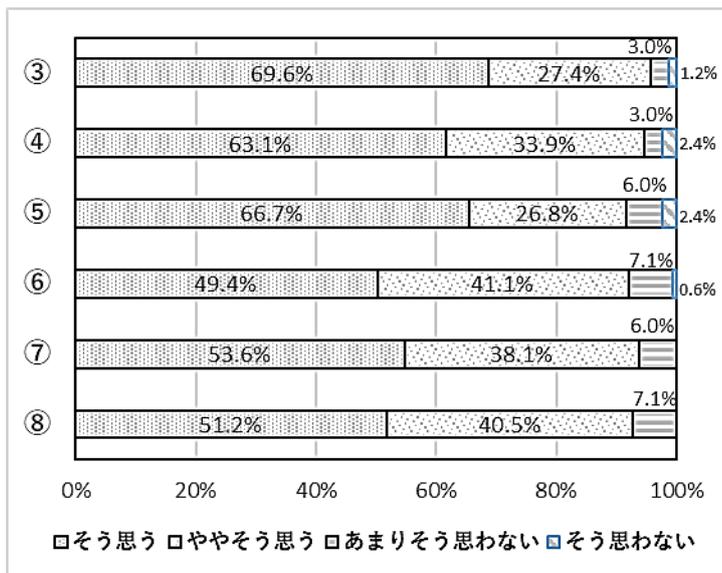


図1 「学年集団(生徒)のまとまりについて」に対する回答 (n=168)

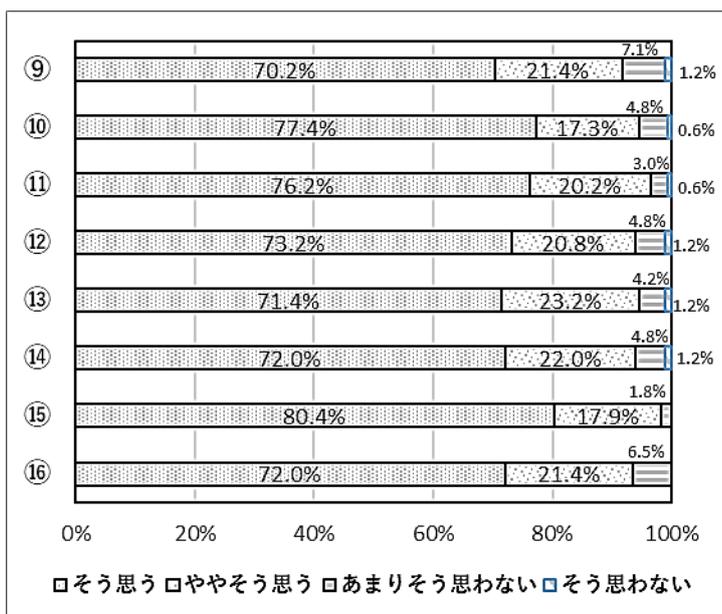


図2 「学年集団(教員)のまとまりについて」に対する回答 (n=168)

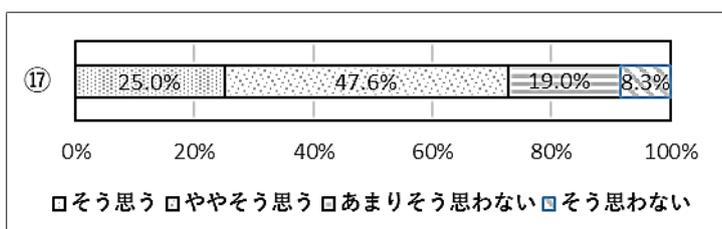


図3 「道徳教育の視点について」に対する回答 (n=168)

## (2) インタビュー調査

インタビュー調査のねらいは、これまでの学年運営の中で、成長が見られた学年について聞き取ることを通して、年次リーダーあるいは学年職員が実施した取組が生徒の心理的安全性、自己肯定感、帰属意識、他者理解、規範意識とどう関連したかを明らかにすることである。

研究推進委員の所属校(6校)の教員を対象に、インタビュー調査を実施した。研究委員がペアを組み、互いの所属校の教員へインタビュー(オンライン)調査を行った(表3)。

表3 インタビュー項目

質問①	生徒の集団としての成長がみられた学年について、具体的に該当学年団を教えてください。ご自身がリーダーをした学年でも、そうでない学年でも構いません。そうでない場合は、当時のリーダーを思い出しながらお話しください。
質問②	何をもって集団としての成長がみられたと判断しましたか。
質問③	該当学年の変化を変化前、変化後をそれぞれ一言で教えてください。
質問④	-1 学年立ち上げ時 学年目標・ビジョンについて
	-1 学年目標や立ち上げ時のビジョンはありましたか。(なければ④-2-1へ) -2 (あったら)それはいつ、だれが、どのように決めましたか。 -3 学校目標との関連性は意識していましたか。 -4 どのように周知しましたか。 →生徒に向けて →教員に向けて -5 学年目標、ビジョンを達成するために行っていったことはどのようなことですか。
	-2 生徒集団について
	-1 立ち上げ時はどう見えていましたか。 -2 どのように変わっていききましたか、または変わりませんでしたか。 -3 (変わっていたら)変わった要因やきっかけはなんだと思いますか。
	-3 教員集団について
	-1 立ち上げ時はどんなことに期待をしていましたか。 -2 どのように変わっていききましたか、または変わりませんでしたか。 -3 (変わっていたら)変わった要因やきっかけはなんだと思いますか。 -4 リーダーとしてどのように関わっていましたか。
質問⑤	各学年での行事 -1 入学式や卒業式を通して学年のまとまりを促す取り組みはしましたか。また、どのような様子でしたか。 -2 校外研修、～祭、学年集会などで特に学年のまとまりを促す取り組みはしましたか。 -3 各行事を通して、生徒はどのように変わりましたか。 -4 各行事を通して、教員はどのように変わりましたか。
質問⑥	他学年や学校(分掌など)との調整の窓口として、コミュニケーションを取るうえで意識していたことはありますか。
質問⑦	生徒について、学年目標やビジョンはどのくらい浸透しましたか。または、どのように変容していききましたか。

インタビュー調査の結果を抽出して、3名分を表4にまとめる。結果より、挨拶や積極的な関わり等が生徒との関係構築に寄与していること、また、学年の目標や学校の課題の共有や教員同士においてもコミュニケーションを図りやすい環境構築が重要であることが明らかになった。

表4 インタビュー調査の結果(発言を原文のまま記載・下線は筆者)

	A校の実践(年次リーダー 副担任)	B校の実践(年次リーダー)	C校の実践(中学校 年次リーダー)
目標や立ち上 りについて	明確なものではなかったが、 <u>学校の課題</u> を伝えた。	「ちゃんと税金をおさめられる人間になるう」という学校のビジョンがあり、学年として「 <u>社会に出ていけるようにちゃんと働く人間になれるようになる</u> 」とビジョンをたてた。学年発足の1年前に準備委員で決めた。	1年生は「 <u>協調性</u> 」、2、3年は「 <u>主体性</u> 」「 <u>創造性</u> 」と目標を設定した。週2回の学年通信を発行し、生徒へ周知していった。教員は学年会で周知し、共通認識を図った。
生徒の変容について	人間関係ができ、話がしやすくなったことで、 <u>心理的安全性が担保された</u> 。また、 <u>大学進学を志望する生徒が増えた</u> ことで、 <u>自己肯定感の醸成もされた</u> 。	朝に校門に立って、一人挨拶運動をしていた。最初は挨拶に反応しなかったが、次第にこっちを見るようになり、 <u>次第にうなずき、やがてこんにちとはと返すようになった</u> 。入学した280名中卒業したのは半分程度だったが、 <u>学校をやめた子も学校に来てくれたり、弟や妹を連れてきたりした</u> 。「 <u>ここに来れば面倒を見てくれる</u> 」と思ってくれていたし、 <u>実際にそう言っていた</u> 。学校を嫌でやめたわけではない生徒も多くいたためか、 <u>今でも連絡がくる生徒がいる</u> 。	人間的成長が見られた。
生徒との関係構築について	教員側の思いや目的をしっかりと伝えたことと同時に、 <u>教員も生徒と一緒に</u> なって関わる <u>ことが人間関係の構築に繋がった</u> 。	生徒のところに積極的にいこうと共通認識を持った。不登校の生徒や課題を抱えた生徒が多い学校だったが、 <u>会議も極力減らし、教室や部活になるべく顔を出した</u> 。それが生徒にとって、 <u>心理的安全性ができて教員に対しても心を開くようになった</u> 。	教員に対して、 <u>不信感のある生徒が多い</u> 中で、 <u>教員が積極的に生徒と積極的に</u> に関わり、「 <u>大人の本気</u> 」を示すことで <u>生徒からの信頼関係を築いていった</u> 。
教員に 関する 関係 構築 について	着任にしてすぐに担任になる先生が動きやすいように <u>一歩引いた立場を意識した</u> 。	新校ということもあり、2期生を迎えるにあたり、1年目の担任団で理解をしている人をもう1度1年の担任として3分の1～半分程度入れた。 <u>縦のつながり</u> を続けていけるようにした。	率先垂範を心がけていた。 <u>担任のフォローに入る(面談や生徒指導)</u> 。学年団は6名と少なく、 <u>新採用の先生も2名</u> いた。コミュニケーションの図りやすい環境であった。
具体的な事例	質問⑤-3「 <u>ナイトハイク(21時に出発して40km歩く活動)</u> 」を実施した。 <u>任意参加</u> だったが、3学年で約300人が参加した。ゴールではPTAが炊き出しを用意した。達成感、開放感、一体感を共有し、 <u>人間関係の築くことを目的</u> としている。 また、⑤-1では、「 <u>対面型の卒業式</u> 」を実施した。「 <u>君たちの卒業式</u> 」というメッセージを伝え、壇上ではなく、 <u>平場で保護者と対面する形を取った</u> 。大変だった生徒がしっかりと式に参加した。学年リーダーとして、 <u>担任の先生方が意見を言いやすいチーム作りを意識し、教員集団のまとまりを図っていた</u> 。	生徒の学校生活のなかに、 <u>教員が積極的に関わっていくこと</u> 。挨拶運動や教室、部活動に顔を出し続けたことが、 <u>行事をする際に、同じ方向を向いて取り組んでくれた</u> 。	学年で「 <u>デイキャンプ</u> 」を企画し、歩いてキャンプ場まで行った。道中さまざまな問題を班で解決しながら、 <u>食材を集めて、飯盒炊爨をする行事を行った</u> 。班で協力して課題を解決していくこと、 <u>これが「協調性」なんだと</u> 伝えた。「 <u>自分のことを我慢して周りに合わせていくことでできることがある</u> 」と伝えた。この行事を通して、 <u>教員、生徒も目標に向かって、みんなで協力することの大切さを再認識し、学べた</u> 。

### 3 研究の結果と考察

以上のことから、学年集団をまとめていくうえで、次のことが共通する事象として見いだすことができた。

- 「シンプルな目標設定」
- 「生徒との信頼関係の構築」
- 「教員同士のまとまり」

学年リーダーの強いリーダーシップによる学年運営ではなく、共通の目標(方向性)に向かって教育活動を行っていくことが、生徒のよい変容を促すことが分かった。

教員側が目的をもってしっかりと生徒に向き合う、巻き込む、一緒にやる、ということを前提に取り組むことで「生徒との信頼関係の構築する」ことが分かった。

教員としてのあり方についても、初任者の多い学年や中堅世代の教員が多いなどさまざまである。その中で明確な目的意識とその共有が、足並みのそろった学年(行事)運営につながっているように見える。

社会情勢の変化が著しく、学校や教員に求められていることも時代とともに多様化しているため、シンプルな目標を立てづらくなったのかもしれない。チームとしての目標はシンプルである方が望ましく、そこに知恵をしばることが、学年職員のまとまりを生み出す為に必要なことだと考える。

#### 4 課題と今後の展望

今回の調査では、行事運営の際、教員が道徳的視点を意図して積極的に取り入れているとは言えないことが分かった。実際には無意識的かつ無自覚的に行われていて、インタビュー調査を通して、言語化、意識化できたことは大きな成果でもあった。今後、学年運営をするうえで参考になるデータや知見を得ることができた。

学年運営(行事を含む)を通して道徳的側面が成長することが分かったが、今後は意図して道徳的視点をもった行事計画、実施をしていくことが課題だと考える。

また、「指導と評価の一体化」の視点から見ても、道徳的視点をもった行事を意図的に実施していくことは重要であると考え。学年運営も目標に向かって日々の教育活動を実践し、振り返りを行うことで、生徒の変容をみとることができる。また、その振り返りの中でみえた課題を次の指導の改善に繋げていくことができる。

#### 引用文献

文部科学省 2022『生徒指導提要(改訂版)』 p. 60、p. 66

[https://www.mext.go.jp/content/20230220-mxt\\_jidou01-000024699-201-1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230220-mxt_jidou01-000024699-201-1.pdf)(令和7年11月9日取得)

神奈川県教育委員会 2025『令和7年度 学校運営の重点課題【高等学校版】』

[https://www.pref.kanagawa.jp/documents/14464/01\\_r7\\_jyuten-kadai\\_high.pdf](https://www.pref.kanagawa.jp/documents/14464/01_r7_jyuten-kadai_high.pdf)(令和7年11月9日取得)